# 「小さな移住」と「大きな移住」
## 日本版 CCRC と UR 団地小規模多機能ホームとの比較から

浮ヶ谷幸代（相模女子大学）

発表者は、これまで日本における老いと看取りの「場所性」と「継承性」についての研究に取り組んできた。特に、前者の「場所性」について議論するためのキーコンセプトとして、欧米で生まれた Aging in Place（住み慣れた場所でいつまでも）という概念に依拠してきた。これが謳われた背景には、高齢者施設の大型化と介護度に合わせて住まいを転居する高齢者の生活実態に対する批判があった。

日本では、この概念が保健医療福祉政策における在宅医療を支える「地域包括ケアシステム」の根本理念の基盤に据えられた。このケアシステムは地域で暮らす高齢者のために医療から介護へと連続したサービスを提供できるように目指されたシステムである。この施策に呼応するように、エイジングインプレイスは多義的に解釈され、地方行政レベルでの高齢者ケア対策や民間レベルでの福祉施設の運営の際に援用されている。

発表者は、2018 年度の日本文化人類学会第 52 回研究大会の分科会で、神奈川県藤沢市にある小規模多機能ホーム（小規模多機能型居宅介護施設）〈ぐるんとびー〉を利用している認知症高齢者とその家族の事例を提示した。利用者とその家族は、他の高齢者とルームシェアするために UR 団地（UR 都市機構団地）の一室に移住（引っ越し）し、看取りを視野に入れた「自宅でない在宅」（外山 2011）での暮らしを選んでいる。その事例を通して、都会の高層マンションでの Aging in Place を実現させた一つの例として提示した。

現在、この UR 団地では〈ぐるんとびー〉を利用するために、老老介護の限界、独居高齢者の経済的理由と介護の限界、高齢者夫婦の不安や暴力の回避、同居する息子の都合、リハビリを目的とする等、さまざまな事情を抱えた高齢者たちの移住が始まっている。それと並行して、〈ぐるんとびー〉代表者の家族、スタッフや学生の経済的事情と地域づくりへの関心等により、UR 団地の空き室への移住（入居）が増えている。しかも、〈ぐるんとびー〉スタッフは団地の自治会の活動に参入し、自治会役員を引き受けるスタッフも現れた。本報告では、これらの利用者とスタッフの動きを「小さな移住」と呼ぶ。

他方、政府と地方自治体レベルで企画された高齢者ケア対策としてのモデル事業、日本版 CCRC: Continuing Care Retirement Community（継続的ケア付き高齢者コミュニティ）という大規模な高齢者の移住計画の取り組みが始まっている。これは、第二次安倍内閣の「地方創生」政策の一環として位置づけられ、日本版 CCRC は「生涯活躍のまち」と訳されている。その目的は、東京圏高齢者の地方移住への希望を実現するためであり、元気なうちに高齢者が地域でのアクティブな生活を送ることを前提とし、必要時には継続的なケアを受けることができる地域をつくることが目指されている。この日本版 CCRC の試みを本報告では「大きな移住」と呼ぶ。

CCRC とは、1970 年代以降アメリカで急速に広まった高齢者施設のための取り組みであり、しかもその根本理念には Aging in Place の概念が据えられている。確かに、日本版 CCRC でも根本理念に Aging in Place を据えおき、都市在住の高齢者の地方への大型移住を目指すところはアメリカ CCRC と共通している。しかし、政治的、経済的、社会的な文脈が異なることから、日本版 CCRC は各地でさまざまなバリエーションを伴いながら文化変容を遂げつつある。アメリカでは篤志家や私設 CCRC が中心となっているため、資金確保という経営的な基盤が最大の関心となっている。それに対して、日本では国家と地方行政が推進する施策であるため、「まちづくり」や「地域づくり」という視点がクローズアップされている。

本報告では、日本版 CCRC の「大きな移住」と、「地域をひとつの大きな家族に」をスローガンに掲げている小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー〉の「小さな移住」との比較を通して、Aging in Place の概念をもう一度検討し、看取りを支える「コミュニティの力」について考えていく。

**キーワード：住み慣れた場所でいつまでも　UR 団地　CCRC（継続的ケア付き高齢者コミュニティ）小規模多機能ホーム　地域**